

世界を分割した 帝国主義列強



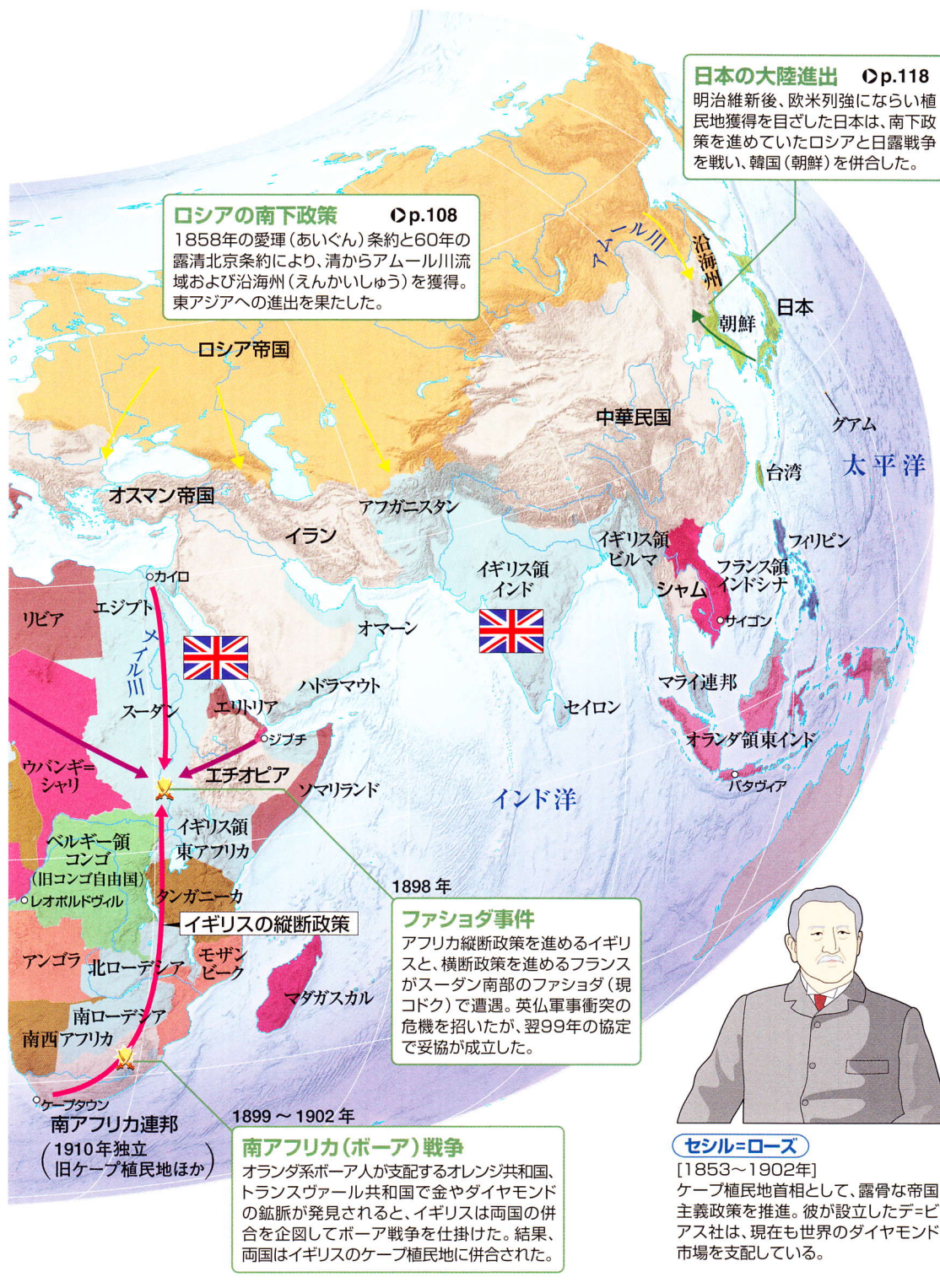
19世紀後半以降、帝国主義化した列強は、市場と原材料供給地を求めて植民地獲得競争をくり広げ、世界をくまなく分割した。

日本の大陸進出 Op.118

明治維新後、欧米列強にない植民地獲得を目指した日本は、南下政策を進めていたロシアと日露戦争を戦い、韓国(朝鮮)を併合した。

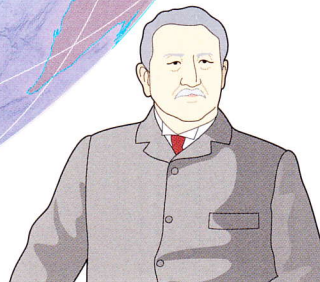
ロシアの南下政策 Op.108

1858年の愛琿(あいぐん)条約と60年の露清北京条約により、清からアムール川流域および沿海州(えんかいしゅう)を獲得。東アジアへの進出を果たした。



1898年 ファシヨダ事件

アフリカ縦断政策を進めるイギリスと、横断政策を進めるフランスがスーダン南部のファシヨダ(現コドク)で遭遇。英仏軍事衝突の危機を招いたが、翌99年の協定で妥協が成立した。



セシル＝ローズ

[1853~1902年] ケープ植民地首相として、露骨な帝国主義政策を推進。彼が設立したデビアス社は、現在も世界のダイヤモンド市場を支配している。

1899~1902年 南アフリカ(ボーア)戦争

オランダ系ボーア人が支配するオレンジ共和国、トランスヴァール共和国で金やダイヤモンドの鉱脈が発見されると、イギリスは両国の併合を企図してボーア戦争を仕掛けた。結果、両国はイギリスのケープ植民地に併合された。

一気に分割されたアフリカと 激化する植民地獲得競争

アフリカでは1880年代以降、一気に植民地化が進んだ。その主役となったのは、カイロとケープタウンを結ぶ縦断政策を進めたイギリスであった。なかでもケープ植民地首相のセシル＝ローズは、拡張政策を推し進め、1899年に金やダイヤモンドの資源をねらって南アフリカ(ボーア)戦争を引き起こした。そのイギリスに対抗したのが、アルジェ

イギリスの覇権のかげりと 帝国主義政策の台頭

19世紀半ばまで、世界経済の中心はイギリスであった。しかし、1870年代からの不況で各国が保護関税政策に転換するようになると、自由貿易政策の下で繁栄を保ってきたイギリスの覇権にかげりが見えはじめた。また、不況を乗り切るため、とくにアメリカやドイツで企業の集中が進むと、鉄鋼や化学、機械など大規模な設備投資を要する分野での技術革新が進み、第2次産業革命が起こった。こうした工業化や保護関税政策の推進にとともに、自国製品の市場として、また原料の供給地確保の必要性から、列強各国は植民地獲得を目指す帝国主義政策を推進するようになった。



セオドア・ローズヴェルト

[1858~1919年]
アメリカ合衆国第26代大統領。
独占資本への規制を強化する一
方で、対外的には帝国主義政策
を推進した。

アメリカのカリブ海政策

米大統領セオドア・ローズヴェルトは、キューバを半植民地化するなど、カリブ海を自国の勢力下に置く政策を推進した。その方法は軍事力を背景とした強引なもので、棍棒外交とよばれた。

モロッコ事件

英仏協商でフランスのモロッコ支配、イギリスのエジプト支配が相互承認されたことに反発したドイツのヴィルヘルム2世は、1905年と11年の2度にわたってフランスによるモロッコの保護国化を覆そうとしたが失敗に終わった。

太平洋

大西洋

米西戦争

キューバで起きた反スペインの独立運動を利用したアメリカは、1898年、ハバナ湾での米軍艦爆沈事件をスペインのしわざと決めつけ宣戦。スペインからフィリピン、プエルトリコ、グアムを奪った。

パナマ運河

フランス人レセブスが1881年に着工したが失敗。その後アメリカが運河建設のため、パナマ共和国をコロンビアから強引に独立させ、1903年に運河建設地帯の管理権を獲得。14年にパナマ運河を完成させた。

アフリカ分割

1884~85年のベルリン会議で「無主の土地への先占権」が認められ、以後列強によるアフリカ分割が急速に進んだ。輸出作物の強制栽培などにより、アフリカの社会・経済は大きな打撃を被った。

列強の植民地 (1912年)

- イギリスとその植民地
- フランスとその植民地
- スペインとその植民地
- ポルトガルとその植民地
- オランダとその植民地
- ベルギーとその植民地
- ドイツとその植民地
- イタリアとその植民地
- アメリカとその植民地
- 日本とその植民地

「コンゴ」自由国

アメリカの新聞記者スタンリーがコンゴ川流域を探検し、その資源の豊かさを紹介すると、ベルギー王レオポルド2世はコンゴ領有を宣言し、1885年にコンゴ自由国と称する植民地をつくった。この植民地はレオポルド2世個人の私有植民地で、土地の収奪、象牙や天然ゴムなどの強制徴収や強制労働、従わない住民の虐殺など、およそ「自由国」の名前とは正反対の残酷・苛烈な支配が行われた。そのため国際的な非難を浴び、1908年にベルギー政府へ移管された。

一方、19世紀末には世界最大の工業国になったアメリカ合衆国は、98年の米西戦争でフィリピンやグアムなどを獲得。さらにハワイを併合して太平洋地域への勢力拡大を本格化させ、カリブ海諸国に対しては、内政に武力で干渉する棍棒外交を展開した。そのほか、ロシアは東アジアや中央アジア、バルカン半島へ、日本は朝鮮半島や中国へ進出するなど、帝国主義政策による植民地獲得競争は世界各地で展開された。そして、激化した列強の勢力争いは、やがて第一次世界大戦(P125参照)へとエスカレートすることになる。

一方、19世紀末には世界最大の工業国になったアメリカ合衆国は、98年の米西戦争でフィリピンやグアムなどを獲得。さらにハワイを併合して太平洋地域への勢力拡大を本格化させ、カリブ海諸国に対しては、内政に武力で干渉する棍棒外交を展開した。そのほか、ロシアは東アジアや中央アジア、バルカン半島へ、日本は朝鮮半島や中国へ進出するなど、帝国主義政策による植民地獲得競争は世界各地で展開された。そして、激化した列強の勢力争いは、やがて第一次世界大戦(P125参照)へとエスカレートすることになる。

リアからアフリカ東岸に向けて横断政策をとったフランスで、両国の利害対立は1898年のファシヨダ事件などで顕在化した。また、ドイツがカメルーンやタンガニカを、イタリアがリビアやソマリランドを、さらにはベルギーがコンゴを植民地化するなど、ヨーロッパ列強は競ってアフリカ分割に参加した。